る）という言葉があり、歓迎そのものも久遠の本仏が仮の姿となって現れたものであるとされている。

観光ブームで、私もあちこち旅行して見たが、あちこちに神と仏とが同じ地域に祭られているところが実に多い。

「前は神、うしろは仏、極悪のよろづの罪を砕く石地」とお経にある、伊予石槌神社と前神寺、那智の滝で有名な熊野権現と青岸渡寺、その外例をあげると限りがないが、是等は唯単に同じ所に祭ってあるのではなくて、必ず一緒に祭られるようになった何らかのいわれがある。

平安朝から鎌倉時代にかけて、武家が立願のために神社に法華経の写本を奉納している例は多い。私達が青年の頃まではよく病気平癒の為に、氏神に千願心経をあげたものである。

このような神仏合体のあり方に対しては、昔から反対がないわけではなく、大きく表面に現れるようになったのは江戸時代中期以降で、国学が勃興したことと共に国学者、神道家、志士等によって国体の顕彰がさかんになり、仏教は異国の教えであると批難排斥する風潮がようやく強まり、それが明治維新後そのまゝ明治政府に引つがれて、神道と仏教とは一線を劃し、神道はいわば国教の位置におかれたが、仏教の保護は停止されてしまった。

然し社会通念としての昔からの寺檀関係はそのまま残って今日に至っているが、敗戦と同時に此度は神社神道に対する国家の保護は勿論、一切の宗教に対する保護は廃止されてしまった。

仏教は何宗にかゝわらず親しめば親しむ程奥が深く限りがないが、平和国家を念願する日本人は、今こそ真の仏教精神に帰るべき時ではないかと思う。

話は余談になるが、聖徳太子の十七條の憲法第一條に、「和をもって貴しとなす」とあり、現在の世相に照らして余りにも和の欠けていることを歎げかわしく思う。己の主張こそ正しいのだといううぬぼれが強すぎて、社会との適合性を考えず、正義だ、平和だといって、いがみあっている様は全く修羅道である。国際社会を見ても、中共、ソ連、米国をはじめ、中東、東南アジア各国それぞれ己の主張を固執し、国会では与党と野党、大学では大学当局と学生が、会社では経営者と労組が、家庭では親子近親者が互に対立してゆずり合いをしない、どこに和があるであろうか。

この際みんな頭をウンと冷して、和こそ社会と人間の最も正しい姿であることを考えてみたらどうだろう。神仏合体考がとりとめない結論に達して申訳ないが、何かの参考になれば幸である。

（住所　南海部郡本匠村大字三浦）

追想

番匠の歴史に憶う

本会賛助会員
大阪　木田　長

私達異郷に住む者にとって、故郷の音便りはたまらない御懐かしかりたてられるものである。私は又特別例外かも知れないが――――。

少しオーバーかも知れないが、私には自分の生まれた土地が、世界の中心の様な錯覚にとらわれ、この四十余年間変ることがない。

「番匠川」――それは本当になつかしい名称である。

私はことある毎にこの名称の出所を確めようとつとめているが、未だその結論に達していない。

抑〻番匠とは、大工、船大工、橋職人、木工、水挽等を指す言葉で、大工の名に限ったことではない様である。古書を探せば、鎌倉時代、室町時代に盛んに使われた呼称のように思われる。

では何故郷土のこの川に、番匠なる名称が付けられたのであろうか。私流に考えて見たい。

「吾妻鏡」に、緒方惟栄が元暦の源平合戦に「軍船八十四隻を参河守範頼に献じ――」とあるところから、豊後には当時相当大掛りな造船設備があったのではなかろうかと推測する。また此の地は速吸水軍の基地とも聞いて居り、豊南の奥地には豊富な木材資源を有し、地理的に云っても格好な場所とも云えるのではなかろうか。

大友、大内の抗争は内海をはさみ相当長期にわたって続けられ、常に大友軍が有利な地歩を固めていたのも、船舶が豊富であったことも確かである。かの嘉吉年間の大内来攻も、その造船基地の襲撃ではなかったであろうか。

尚又大友宗麟が切支丹によって海外と交易し、舶来文明を輸入するため海外に多くの使節を派遣したことも聞いて居り、此の当時の船舶はその内には備船もあるが、我が国建造のものもあり、造船技術も取入れ想像以上のものがあったと聞いている。かの伊藤マンチョ（満千代）等をローマ帝国に送り、又印度、中国、カンボヂヤ等にも使節を送っている。

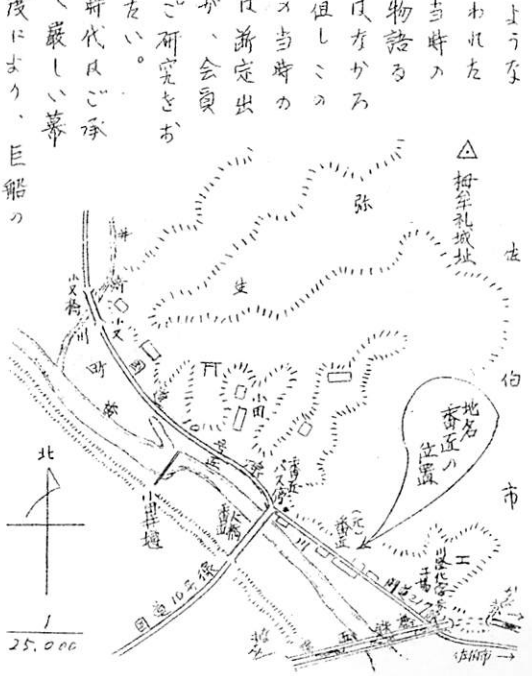
これら船舶の造船基地はどこであったか。

〝一度来なんせ　佐伯の城下
浜に小艦（黄金）が出ておどる〟

このような歌が唄われたのも、当時の繁栄を物語るものではなかろうか。但しこの歌がその当時のものとは断定出来ないが、会員各位のご研究をお願いしたい。

江戸時代はご承知の如く厳しい幕府の法度により、巨船の建造が禁止されたことは彼の黒田藩の出来事で明らかな様に、造船技術は衰退の一路を辿り、全く巨船の姿を見ぬようになった。

この地に集落をもって、黄金乱舞の全盛を誇った番匠達も次第に姿を消し、多くの番匠達は農耕に従事したものであろうが、今に至るまで農家には大工（番匠）達が半ば世襲職業のように、男子が誕生すれば必ずと云ってよいほど、大工職につけようとするのも奇と云えるのではなかろうか。



（編者附言）

○余白の関係から「番匠」の地名に関する地図を挿入した。弥生町に属し、番匠大橋の秋バス停から東南、国道二七号線をはさんで番匠の集落はあった。今は河川堤防と国道で消え失せ、寿売局の煙草取扱所があるだけである。或はずっと昔の番匠は川登化学の工場のあった辺りではあるまいか。

○ともかくも木田氏の番匠―船大工の着想は、場所は別として面白い発想であると思う。　寄稿感謝